

「オシラサマをめぐる伝承曼荼羅一馬と桑と竈神と土地神と一」【サマリー】

百田弥栄子

小南一郎氏（京都大学人文科学研究所名誉教授）は1998年に発表した「馬頭娘（蚕神）をめぐる神話と儀礼—オシラサマの原郷をたずねて—」（『女神—聖と性的人类学』平凡社）という論文の中で、年末に蚕神を祀る儀礼（十二月十二日）については、それぞれの家の神である竈神の祭祀と重なり合う部分が少ない。なぜ蚕神と竈神が深い関係をもつのかといった問題の解明は、将来の課題であろう。という問いかけをされた。本稿はこの設問に対して、伝承曼荼羅の視座から究明しようと試みたものである。

太湖南部では、旧暦十二月十二日の蚕神の誕生日の時期にそれを専門とする人々が天秤棒を担ぎ銅鑼を鳴らしながら小さな蚕神の塑像を守って村々を巡る。養蚕農家が一隊を招くと芸人集団は蚕神の塑像を奉じて蚕室に入り、蚕花歌を歌う。一方竈神祭りの儀礼には唐代まで遡るとされる竈神舞の習俗がある。旧暦十二月一日から二十四日頃まで、乞食（こつじき）の一隊が面具をつけて市中を跳梁し、竈神夫婦に扮した乞食を中にして沿道を練り歩き、竈神の乗物や供物などを売り、竈君歌を歌いつつ舞いながら一軒一軒回り、旧年の穢れを祓って新春を迎える。蚕神と竈神の式次第は、確かに同じような進行をみる。

ところで蚕神（オシラサマ）には神桑（神樹）と神馬の物語がある。水から出現する神馬は自らの山の龍脈を駆け上るという習性によって竈神の物語を紡ぐ。神桑は文献ではその梢に金鶏（玉鶏、太陽）を頂く扶桑樹のことであり、金鶏は則ち雷神（鍛冶神）のこと。蚕神は竈神ばかりか神馬、神桑、土地神、龍神などと有機的にかかわっている。加えて竈神と蚕神とは共に神馬の働きが大であり、共に昇天して天地を往来し、共に家々の守護神であるという点も共通する。伝承曼荼羅の世界である。